



9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
698
699
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
798
799
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
839
840
841
842
843
844
845
846
847
848
849
849
850
851
852
853
854
855
856
857
858
859
859
860
861
862
863
864
865
866
867
868
869
869
870
871
872
873
874
875
876
877
878
879
879
880
881
882
883
884
885
886
887
888
889
889
890
891
892
893
894
895
896
897
898
898
899
899
900
901
902
903
904
905
906
907
908
909
909
910
911
912
913
914
915
916
917
918
919
919
920
921
922
923
924
925
926
927
928
929
929
930
931
932
933
934
935
936
937
938
939
939
940
941
942
943
944
945
946
947
948
949
949
950
951
952
953
954
955
956
957
958
959
959
960
961
962
963
964
965
966
967
968
969
969
970
971
972
973
974
975
976
977
978
979
979
980
981
982
983
984
985
986
987
988
988
989
989
990
991
992
993
994
995
996
997
997
998
999
999
1000

始

特115
786



朝風詩歌集第一篇

戀と餓

西出朝風著

上卷



者著の時當理整集本

影撮七・三・八一九一





此一篇を竹久夢二氏に呈する

私がどんな生活をして、其生活の中に何を感じ、其感じをどう歌つたかは、此集の作自身が最も明瞭に答へてくれます。

外形的な者に就ては多少言ふ事が出来ます。然しそれも大體は刊行會の趣意中に記されておりますから申しません。

唯趣意の言葉に一二を添へますれば、私は短歌の、俳句の、純正長時の純粹を擁護します。けれども短歌なり俳句なり純正長詩なりが形に因る名稱である限り、此純粹主張と新形式の創製との別問題である事は言ふ迄もありません。極めて明瞭な事ですがともすれば

誤つて論じられますので一言します。

又現代語を用語とする私の詩歌に現代語の調子がないとか、或は俚謠風だとか言ふやうな批評を耳にした事が少くありませんが、私はこれに對し、私の足りない所に充分な反省の眼を開きながら、なほ次の二問を記したいと思ひます。「評者の現代語の調子と言ふ内容に現代日用會話の調子と言ふ意は錯つてをりますまいか。」「聯合音脚排列の約束に相違はありますか、同じ純正音律に生命を有つた純正長短詩と俚謠とが或點に於て類似の感動を誘ふのは、反つて其純

正が保たれてゐる故ではありますまいか。』

序でに純正と言ふ言葉に就て念を入れておきます。私の言ふ日本語詩に於ける純正とは、音數、音脚、單音の三者を貫いて有形旋律を有つた者の謂ひです。

が、私はかうした外面的な理窟めいた事を言ふのを餘り好みません。それよりももつと深く深く私の内部の世界の事をおもひたい。

大正十八年三月九日

著

者

北國流浪

大正四年春——同六年中。金澤市

二首、東京を流れでる日

どん底の見てはならないものを見た、
いろいろ見てはならぬもの見て。

太陽は地球らかれの惑星を、
おれはつま子をつれて流れる。

おなじ日伊東音次郎君に

東京のもののあひだに音さん
顔ののこるもかなしいひとつ。

ほく國へ流れて歌ふ身といへば、
ふるさとながら涙ながれる。

すとしづつまた新聞の雑報に。
馴れてく筆を見ればかなしい。

さい川の橋のたもとに將棋さす
車夫もふかれる、葉やなぎの風。

朝風あらわはいまふるさとの新聞の
記者になつたとわれをあはれむ。

あるときはふるさと加賀の新聞の
記者で死んでもいいとおもつた。

同僚につま子にけふも口きかず、
われの頭あたまにわれでもの言ふ。

をとひも、きのふも、けふも黙黙と
人もはたらく、おれもはたらく。

晝は靴に水しみ、よるはいくたびか
燈の消えどもりする冬がきた。

子がうまれ、そだつことなどなんにせう、
わがさびしさは日をおうて増す。

雑報はその日その日に消えてゆく、
その書きぬしのおれも消えていく。

あすもまた洋服をきてでてゆくか、
ボタンのやうにこころを閉ぢて。

ちぢむさい木綿著物をたいせつに
たたむ人とも世を経ればなる。

このごろは軽い近視を氣にしない、
眼めとちてものをおもふ日おほく。

ある時は肥このにほひとなつかしむ
ほどにもさびし、人をおもへば。

ゆるせ子よ、生きて互にさしてゆく
道がちがへば打擲もする。

「ここそこと内所で雨がふつてゐる。」
女つぶやくはつ秋の宵。

みかへれば親もつま子もあつてない、
ながいさびしい生活をした。

いつの日かこれが別れるわが子等か、
ひとりは膝のあたりにねむる。

泣くものをして泣かしめよ、泣くものを
して泣かしめよ。わが路のうへ。

秋の木をはさんでせなを寄せるとき、
つまにちる葉よ、われにちる葉よ。

つまも泣け、子も泣け、老いた親も泣け、
よわいところは眼めかくして行け。

六首、うつ木女に

かくれ蓑かくれ笠にも似たやうな
不思議はないか、日をかくすため。

おたがひのふたりの子等を殺しても
消しえぬ時をなんとしようか。

うへの子が一つ二つととをまでの
かすよむほどに年経たものを。

くるやうにして來たものを、行くやうに
して行かしめよ、戀も、なさけも。

さめざめとだいて泣くとき、その泣くは
おもひつめてか、身をなげいてか。

おたがひに言つた言葉もしたことも
かならず嘘でなかつたけれど。
(前)

「ああおほきなロマンチックだ。」かういつて
わかい男の死んだ春くる。

こッさ搔き、春の山邊のこッさ搔き、
子つれ日ぐらすそのこッさ搔き。

(こッさ搔き——燃料にする枯松葉)

父なればこそ、叔父なれば、やくざもの
おれにつましくくらせとをしへる。

ある事に激して

あたらしいものは正しい、新人を
われらのなかに立てよ、兄弟。

汗ばんでうこん櫻がふくらめば
生きのびたいとつくづくおもふ。

長男が布團かぶつて寝るくせを
さびしいくせとその母はいふ。

この足をかへさうすべはないけれど、
路にわが子が泣けばかなしい。

かうもりをさすがいとしく、雨はれて
なほ洋傘をさして街ゆく。

なほさらにはがゆく路をほそさせよ、
身にふりかかるおち葉、うすれ日。

三 十 の 戀

大正五年夏—同六年春。金澤市

川ちかくしやく家するのをさいはひと
する、人戀うてさまよふとき。

三十を二つみつこえいとけなく
せつなく人をおもふあはれさ。

あたらしい夜あけか、ながむ日のいりか、
ひと住む空そらにかかるかがやき。

そらの日の干にくだけて散る日にも、
たつた一つのことをおもはう。

戀するは戀するためか、いとせめて
かなしい歌をつくらうためか。

三十の戀はいたまし、ぬばたまの
夜の著物を身にまとふとき。

うつむいて行くもあやしむものがない
うら町をゆく。夏の夜ながら。

その人はなにを見つけて感謝した、
ひところもなくものおもふ日に。

用のない編輯局へ夜おそく
たづねて行つた。——なつかしい椅子。

酒すきな大尉参謀がよろめいて
行つたけれども、笑はなかつた。

リード讀むこどもに似ぬか、木の蔭に
人のたよりをくりかへすとき。

半生^{はんせい}にはじめて遇うたおどろきを
どうおどろけばよかつたものか。

水涸れた川ごを見て、胸の血の
きみへながれたあとにおどろく。

「……^{じゅうだん}串戯におうけをするのでしたわねえ。」
にくくたくみな人のものいひ。

けふの日もきみをおもうて日がくれた、
きみをおもうて夜があけてから。

そのひさが人をおもうて見暮らした
水のもの渦か、わがしたをゆく。

ただちよつと逢うたばかりのあひびきに
つかれてかへる夏の野の汽車。

ひとめ見てよく知るくせに「おくさん」と
よんだ皮肉な避暑地の仲居。

生きる世の莊嚴きはめ、砂やまの
ねむの葉かげにあはすくちびる。

第一のあひびきの日を記憶せよ、
燃えるそらの日、光るうな原。

そのなかに心にかかるひと言の
眞珠もひろふ。海のあひびき。

をさなげにふたり黙つたさびしさよ、
日かけ燃えれば、松かせふけば。

あひびきのあと夜あけのさめがちの
皮膚の氣孔にしみるひぐらし。

なにか斯うしないでをれす、さい川の
橋のうへから河原へと飛ぶ。

一生にまたこのうへの濃いいろを
見る日があるか、深藍しんらんの海。

なにもかも知つてゐるよな鳥の眼、
鳥をまへにおもふくちびる。

どうしてか眼にはのこつた、鐵橋の
したの磧のはそい草の葉。

なつかしいものに一つのかずをます、
ちさいむし歯をつつむ黃金。

紙巻をすふ唇も、短靴に
つつんだ足もいとしいちらし、

高くあれ、きよくあれ、また寛ぐあれ、
そしてさびしく悲しくあれよ。

まへおきのない夜よがおちた、それはやはり
二つのものか、ひとつのものか。

「搖籃わうらん」の山にふたりがいだくとき、
「ねんねおしよ」とうたふ松かせ。

暮れゆけば感きはまつてあひだく、
秋のはじめの松おほい山。

いとせめて死なうと人の言つたとき
かすかに月があつたかとおもふ。

「あかんばよ。」「え、え、え。」「ふたりはあかんばよ、
こしてからだを搖すりませうよ。」

あひいだけばふたりともに松くらく
日ぐれた山の土も汗ばむ。

あるかない月のかげ這ふ、原のうへ、
人のひとみを見わけうるほど。

風もなく澄んだ空からくろ髪に
青い松葉のおちる秋やま。

そのひとがものつましくいはりする
秋のにはひのたかいまつ山。

永遠の草葉はかをり、蟲はとぶ。
ふたりいだいた足のあたりに。

長詩の反歌

人よ、きてわがめのまへに立ちつくせ、
君をみつめておもひ死ぬまで。

こひびとをして待たしめよ、泣かしめよ、
つきの逢瀬のかいだきのため。

このうへにもつとおもへと、ことさらには
けふもきのふも逢ひにこぬのか。

逢はれないなげきをさらに歎げとて、
人はきのふは逢ひにきたのか。

うつむいて路ゆく癖をつけたのは
そこいらへきた秋かでないか。

きみに似たかほにあふさへいたましく
秋ゆく街の土を見てゆく。

ゆく秋のそれでなうでもさびしいに、
わかれともない、わかれともない。

小春日の朝日にぬれて塗まくら
ぐぐり枕にそへばいとしく。

ただひと目見たいばかりに十基米の
秋の野みちをたどる短靴。

ふた柱、わかない男女の神のやう
夏ゆく夜の山をおりたか。十枝

十二時のよるの旅籠にきみひとり
おいでたゞつた、しぐれする街。

半としはしあはせおほくすぎさつた、
山のあひびき、海のあひびき。

松かせのかかるとき吸ひ、月かけの
身にしむときにかたくいだいた。

せにのない月のみそかにうつむいて
みち行くときも君をおもつた。

一生に一度^一のこひをするために
おもつた人をつつむ友染。

あるときの別れかなしや「このつぎは
たんとおかねを持つてきまえう。」

君にあふ日のくるほかは髪そらぬ
ほどにものをばおもふ朝ゆふ。

ほく國の雪のなかゆくわが靴の
ぬれぬ日はなく、泣かぬ日はなく。

この夜のよるに逢へるか、あへないか、
また金澤のそらにちる雪。

戀すればかうもすなほになるものか、
小むすめのやう泣きくせがつき。

なせかうも悲しい戀をしたかいや、
かなしい戀へさそひだしたか。

人なみに、たよりなけれど氣迷うて
をりもせぬかとおちふはる雨。

早春の日ぐれはかなし、またおなじ
ことをちかうてふたりわかれる。

ある男のなげき

大正五年初夏。金澤市

たえたかとおもふたよりを聞くことの
どんなにうれしからう。はつ夏。

ある女浪華津に泣き、あるをとこ
越路になげき夏がちかづく。

ある女旅にすむ日に、ある男
旅しをんなのふるさとに住む。

ことなつた日に世にうまれ、ことならぬ
日に世にすむをねがふおろかさ。

つまをもち、をつとをもてば子をもてば、
人はしみじみかたりえないか。

なぜその日入日の赤い満洲へ
君のすがたを追ひはせなんだ。

われわれは性格をもち、われわれは
境遇をもち、運命をもつた。

ちつともなことだけれども、そのときは
なほさびしいときけばわびしや。

いく夏ののちの柳のしげる日に
きみはうまれた金澤をふむ。

おさたてて二度とかへらぬ水がゆく、
かへらぬ水がおさたててゆく。

きみがきてふむ日もあれば犀がはの
河原の草になつても待たう。

ある男のなげき前曲

二十間引ひきこみの 大正四年春。東京小石川關口臺町

十餘年胸の日ぐれにほろほろと
ちるはその日のしら萩のはな。

公園のうすくらがりにただ一度、
手袋ながら指をとられた。

二十圓借りたお金をかへすまのなかつたこともかなしいひとつ。

十餘年いちづに戀うた。かなしい日、
ひとりぼつちのときはなほさら。

そのはじめ酔後のやうな狂態をつくしてふたり死ぬのだつたか。

をはりの首都生活

大正三年初秋——同四年春。東京目黒三田、同小石川關口臺町

郊外はといたばかりの細君の
帶のあひだにこほろぎがなく。

くびあげて坊がうちから往來の
土手見るやうになつた。秋ぐさ。

子の母がはな緒のしたのしろいほど
日やけをしたとはなす。秋の灯。

友達も、つまさへすこし自分とは
はなれた路をあるく。あき草。

なぜかうもきたないものが生きてゐる、
ものをくふ餓鬼、目つかちの餓鬼。

うつむいて行くはかなしい、あふむいて
行くはさびしい、街の秋かせ。

秋の日よ、もつとざつさり照つてくれ、
つかれてさむい、さみしからだへ。

結句このはうがのん氣と細君と
それから口をきかぬ四五日。

家出したとしま女が子をつれて
あちらこちらとあるく、あき草。

くろい眼めをおほきくすゑてふところの
わが子そと見る、朝さむの雨。

狡猾な眼めをして人を見た十歳の
自分はかなし、二十年経て。

淺草へいつて木馬にのるほどの
ところにならぬ。おれはさびしや。

淺草も飲屋奉公して伊東
音さんをればこころがしめる。

秋の暮、いつ本あをい木のしたを
白い牛乳配達車ゆく。

ひるまへの十時、といへば飴屋がきて
太鼓をたたく小春日の坂。

あたりまへのことだけれども、子が親に
かかはりもなく、そだつはさびしい。

日のくれのそらに見いつてものいはぬ
わが子の癖も時にかなしい。

「あの米を持つてこないがどうしませう。」

「また十錢も買はう。」「ホホホホ。」

細君と十錢づつをだしあつて
米買ひにゆく、冬のゆふもや。

ほんのすこしほんのすこしのことでした
だけれどことしも今くれてゆく。

血ひたすら仕事へばかりながれるを
ころよくも見、さびしくも見る。

逢ふたびにおとろへめだつ淺草の
熊にまた逢ふ大晦日の日。

あるときは家ないことが、あるときは
家あることがかなしみとなる。

電線にやれ風をどり、淺草に
ゆき倒れるたおほみそかの日。

かうやつて歩いてゐれば時はたつ、
年はくれてくやがて死んでく。

元日の午前の二時におく霜の
しろきをふんで米買ひにゆく。

五十錢買つてさげれば汗をかく
米やすい年もいまくれてゆく。

しづかにしづかに僕の寝どこへはいるため。
さうだつまとも口をきくまい。

さびしうてさびしうてさびしうてならん、
ほそい命のゆれるまにまに。

どこへ行かう、どこへいつてもおんなじだ、
どこへいつてもうちがないんだ。

「なぜおれは生まれてきたか。」おれの子も
いく年かへてかういふだらう。

酒のみの脳の圖に似た雲しろく
そら一面にうごく冬の夜。

北こくの親と都會の子夫婦は
多分死ぬまでたよりしなから。

おやに似てうまれたことをおれの子も
おれとおなじに呪ふのである。

ただふつ日見ねば、あはねば、つまが子が
涙ぐまれるほどにいとしい。

むづかしい借きんとりの毒ぐちも
馴れてはをかし梅のさくころ。

つまらないことのやうだが人なかへ
でてかなしいはかねのこと。

いぢやないかなにが名譽だ學問だ、
ごこの邊鄙で死にはてようと。

山地白雨君の一年祭に

花がちるから散るまでに變つたといへばかはつたかれ等かの女等。

残した妻子へおくる消息

大正三年七月。東京芝仲門前町

三十になつて子をおきつまをおき
ゆくへもしらぬ旅へけふ立つ。

いつ逢へるわが子か、夏の朝すすに
すやすや寝ればさらにかなしい。

では左様なら、子よ、つまよ、品川の
しゆくの夜あけのきえのこる灯よ。

露ふかい宿場の夏のあけがたに
わかれるといへば繪のやうだけれど。

どこへゆく自分が、夏のていしやはの
朝のひさしを霧がながれる。

洋傘かうもりをすっぽりかぶつて寐たすがた
をかしかつたか、巡査も笑ふ。

「南豆蟲のゐないところはない。」と言ふ。
悲しいことをきくではないか。

母親が小便させる子に父の
車夫がキスする夏の路地口。

あきんごはこのあきんごも出鱈目を
まじめくさつていふがをかしい。

つまよりも子よりも金かねをかはいがる
六十三の父がいぢらし。

わすれてもつま子をおいて旅するな、
わかものなればなほさらのこと。

犬にさへすなほにつかへられはせぬ
まゝ子はかなし。旅でなくとも。

ふとそらをあふいでさへもともすれば
涙ぐまれる、旅びとの身は。

あるときは乳屋の椅子に身をなげて
つま子をしのぶたび人を見た。

この旅はすこし意外にけふをはる、
さらにかなしいたびだちのため。

うき世

大正三年五、六月。東京北品川

こめかみをびすとるでうつことをまた
おもつてみても胸もさわがぬ。

としわかの女郎が青い薬草を
軒の日かけにつるすはつ夏。

姑がなくなると急におかみさん
らしくなつたといふも人の世。

いくたびか自分をもせめてみましたが
やはりあなたをのろひます父うへ。

この氣質^{きしつ}あの經^へきたりをおもふとき、
やはりあなたをのろひます父うへ。

氣がつくとまたいつのまにか沈黙の
家をぬけでてあるいてをつた。

ことさらに生きるいはれをかんがへて
生きてゐるのも厭^うきるぢやないか。

指やれば夢のなかにも指にぎる
わが子可愛いや、わけはなけれど。

はんげちをいちくりながらひとりねる
子もさびしかろ、親もさびしい。

半身を宙にのばしてをかしげに
めめず餌さがす夏の日はきた。

このおや子としづかに赤くたれた灯を
つつみうき世の夜よあけるな。

死んだ白雨君に

大正三年六月。東京北品川

「ああおほきなロマンチックだ」かう言つて
笑つて死んだ笑へばいいのか。

みつ日たち鮪のやうなにほひして
くさつたことなどはなんでもなけれど。

棺を見てきみの鮮あきらはなにいれる
箱かときいた不思議はなけれど。

息あつて、君がのこした扶助料の
詮議をするもみぢめぢやないか。

いとしがつたつまの手紙に顔をうめ
きみはすなほに釘をうたれた。

いきたえたその刹那からいそがしく
土へ土へとかはるかなしさ。

君のつまは君が死んでもめしを食ふ、
いふまでもないことだけれども。

世のなかがむしやうにあぢきなくなつた。
わけてもきみの死んだころから。

四ぐわつなかば花が葉になる東京で
死んだといへば、それだけのこと。

豫期しない大雄辯をきいたのは
きみ口きかずなつたそのとき。

續 餘 情

大正三年春。東京北品川

「ねえ、あなたが首しめ臺へあがるとき
あたしも一しょに」とほほゑんだものを。

こんなにも悲しいならば末とげて
なせ一生ををはらなかつた。

いちらしや、ある山からの手紙には
俳句のやうなものが書きそへてある。

「旅へでてはいつも亭主にすてられる。」
こんな言葉もあるではないか。

ある時は實家へかへつてまにら麻を
ほそぼそつないでゐたこともある。

わすれてはしまはなからうと思ふけれど、
それにしてからが五六年前つた。

そのときになんでおもはうおたがひに
ゆくへもしらず死んでゆかう。

わかれては悲しいをんなひとつ家に
住んではにくみにくんだ女。

集歌 半生の戀と餓

卷上 終

六〇一

跋

昨大正六年初秋、金澤市で開かれた其抒情小品畫展覽會閉會後北加賀の山深い湯涌の温泉に滯在中の夢二氏に、展覽會を記念す可く本篇收容「北國流浪」「三十の戀」中の短歌二十餘首を布地に書寫して郵送した。「山より」はそれに對する感想だ。今許諾を得て此篇の跋とする。(朝風)

山より 竹久夢二

朝風兄へおくる手紙。

山の方へ来てからもう一週間になりました。その間に外へ出られる日は、ほんの数へるほどで、たいてい雨が降つて居ります。宮川君の「やさしい雨」が日本の古い繪巻の中にあるやうな傳説の線のうちに降りそゝいでゐます。私の好きな土藏の白壁も、こゝでは灰色に見えがちです。長い間都會に住みなれた私には、こんな山の中で極少數の人たちとかうして太陽を迎へ月を見ることも珍らしくやさしい経験です。山の方へ来てからは、あなたへの「ある時のある女」

の三枚續を書いたきりで製作らしい製作もしません。けれど毎日はそんなに退屈ではなく、中央で盛んに活動してゐる他の友人たちに比べて損をしてゐることも思ひません。どうしたわけでしょう。都會で懶しく生活してゐる折々の方が却つて退屈で堪へられないことを知ります。しかし、山の中で「無爲にして化す」所へはとてもゆききれない私です。それもあなたはよく知つてくれたと思ひます。あなたが送つてくれた「歌稿」はその間にも私にいろんなことを考へさせました。添へた手紙に批評せよとあつたけれど、私にはさて

も批評は出来ないことを知つてゐます。何故なら、人々には各々そ

の人自身の生活のしかたがある筈で、その人の必然な生活に第三者
がどう是非を言はうやうもないからです。そしてあなたの歌は、ま
ことあなたの現在の生活そのものだから、あなたの生活のしかたの
好惡を言つて見たところでどうなるのでもない。よし私があなた同
様な事實を経験したとしても、あなたの感じ方、考へ方はつひにあ
なたのものだ。

けれど人間には、なんでもない日常の交友の間から、また不用意

な言葉のうちに實に好いものを感じる。それはある人の精神の中か
ら自分のある好いものを見出すからだ。

あなたの歌の中から好い者を感じた幸福を書て批評にかへたい。

唯一目見たいばかりに十基米の

秋の野道をたどる短靴。

小春日の朝日にぬれて塗枕

くくり枕にそへばいとしく。

この歌から私は秀れた靜物畫から受けるやうな靜かないしさを

敷へられた。切ない心持をちつと抱いて秋の野道をたどる男の感傷を説明しないで、「たどる短靴」としたところに、作者が自分を憐みいとしむ心持が、つかずはなれすいかにも果敢なげに歌つてある。佗しい一個の短靴がある人に逢ひにゆくとしても、泪の出るやうな眞實さを覚える。

小春日の朝の床に、塗枕とくより枕とを見出したとき、この小さい静物のよそへる様こそ、大天地にたり二人の眞實そのものと言つても好い。

許せ子よ。生きて互にさしてゆく

道が違へば打擲もする。

泣くものをして泣かしめよ、泣くものを

して泣かしめよ、わが路のうへ。

自分の世界に生のまゝ没してゆくこの作者も、常に周圍にその本能的な愛のきづなを感じないわけにはゆかない。自分の道を深くおしつめてゆけばゆくほど周圍のものや、人間の生活がいとしく、憐まれて來るのである。吾々の路の上には、どんなにあつてもまだ足

りないほどに強い力を要する。

明日もまた洋服をきて出てゆくか、

ボタンのやうに心をとぢて。

錢のない月のみそかにうつむいて
路ゆく時もきみをおもつた。

ボタンの下に心をとぢて「つとめ」に出でゆく心持にこの作者の
まことに得がたい純真なものを見る。我々が生活の路上に行逢ふ人
人はいつの頃よりかほんどのことを言はなくなつた。めい／＼に自

分の術で自分の所有になるものをより多く得るために、實にうそを
いふ。なんのために得ようとするのかその目的は長い世紀の間に忘
れられて、多く持てるものは失ふまいとし、持たぬものは奪はうと
する。智慧をも、財をも、愛をも、夢をも。

多く持つものが必ずしも幸福でなく、少く持てるものが必ずしも
不幸でないことを知つたものは、實にさびしく、あさましい。心を
閉ぢてちつと見てゐるよりすべはない。けれど我々のまへには腥い
血の池の彼方に、新しい世紀が來ようとしてゐる。心の友よ。我々

はもう、心を閉ぢて立すくんでゐる時ではない。
送つて頂いた煙草がなくなる頃には私も山を出るでしよう。金澤
で私の知つた人達へよろしく。

(湯涌、十月五日)

次目篇一第集歌詩風朝

(卷上戀と餓の生半)

序 言
北國 流浪 愛戀 大正四年春 同六年中
三流の戀 大正五年夏 同六年春
十の戀 大正五年初夏 二一
ある男のなげき 大正五年初夏 五三
ある男のなげき 前曲 五九
をはりの首都生活 大正四年春
をはりの首都生活 大正三年七月 六三
残した妻子へおくる消息 大正三年八月 八二
うき 大正三年五月、六月 九〇
死んだ白雨君に 大正三年六月 九六
續情 大正三年春 一〇二
餘情 大正三年春 一〇三
跋山より 竹久夢二氏

刷印日 五月四年七正大
行發日 十月四年七正大

錢八拾參價定

著作及發行者 西出一
石川縣金澤市千日町百五十二番地

編輯者 朝風詩歌集刊行會
石川縣金澤市千日町一五二純正詩社内

印 刷 者 澤田助太郎
石川縣金澤市高岡町九十番地

印 刷 所 明治印刷株式會社
石川縣金澤市千日町百五十二番地

發行所 純正詩社
石川縣金澤市千日町百五十二番地

朝風詩歌集刊行會趣意

私達氏に最も親しい者相謀り、今郷國加賀の一新聞社に職を奉ずると共に、雪猶は深い白山の麓に、思想、藝術方面に於ける獨自の途を心靜かに歩みつゝある私達の詩人西出朝風氏が、過去十餘年間の製作に係る詩歌集の刊行を企てました。

氏が其若い半生を費して成した詩歌の事業が、日本文藝史上に如何なる位置を占む可きか、夫れは私達親しい者の言葉で假定するよ

りも、反つて私達が世の批判を聽かうとする者であります。刊行の趣意の一半は茲に存します。

ただ回想的に氏の詩歌事業の外面に就て二三を記しますれば

一、(俳句方面)氏が最短の詩形俳句を試みたのは比較的遅かつたが、其主張は出發に於て已に極めて自由で、聽て當時の因襲であつた「俳趣味」「唯叙景」「唯客觀」「季題趣味」「題詠」等を排した文章を公表する間に新興俳句分野の大部分を占めた觀ある日本派に所謂新傾向派を生じ、新傾向派に更に分派を生じ、一步一步氏の主張の蹤を従ひました。然し其最善な者を批評して氏は猶ほ「大體善良な方面へ進んだが、詩の根本要素である音樂に全然無自覺だ」と言つてゐます。これは

俳句を純正詩(律語詩)にしようとする氏に於て當然の事であります。

一、(短歌方面)短歌に於て十七八年前の試作に緒を發し用語革命(現代語使用)を絶叫して來た事は最も世に知られた事實で、最近數年は一般をして氏を専門歌人のやうに思はしめた程、此詩形の製作に傾倒しました。尚ほ氏は用語革命と共に俳句同様短歌の純正を擁護して、彼の「破調」等を極力否定しましたが、「破調」が瞬時で姿を隠し、用語亦日を追うて氏の主張に進んで來た事も事實です。氏は前者に就て言つてなります「内容と表現とが不離一體の者であるとしたら、用語革命は普通に信ぜられる以上に重大な意味がなければならない」と。

一、(長詩方面)長詩では氏が生粹の現代語新詩(俗語體等でない)を試作して間もなく、彼の口語詩運動が起り、前後して詩壇一般散文風に趨つて、兎もすれば詩體

の純粹である純正詩(律語詩)を忘れようとしたのに對し、飽迄純粹の擁護に努めて今日に到りましたが、爾後詩壇の傾向は漸次氏の歩みに近付きました。

斯う見て來ます時、氏が若し何等かの學閥、黨閥に緣故を有つてゐましたなら、詩歌集の如き恐らく數年前に上梓された事と信じますにつけ、私達今次の企ては詩歌を愛されます江湖諸賢の御賛同を充分期待し得る者と存じます。切に御援助を希望します。

大正七年三月
發企人

加能岡石神戸
甲府備岡山東京
市賀登市狩市

森山上太土額草四望森山伊西野蘭上竹
井岸森岐見野京月田東谷口久
つ忠雨田曉悲喜熟音正征代龍夢
草恕橋榮る露人月雄郎一郎治夫策耳二

石椎木川上西福佐
浦木村端田尾田竹
露恒志しの良舷義雨
香男郎ぶ作子正雀

西藤西丘木三
出田村村戸枝
つ木不泣萌紅
女汐三果二葛

荒土吉
肥田木
省皺
巖作山

西天岡
出明野
悌愛
二吉

朝風詩歌集刊行會規定

一、詩歌集は叢書として毎月一冊宛、若干月（六箇月以内）に亘り刊行します。

二、毎冊新裁四六判百二三十頁内外、弘い愛讀を希望する趣旨に於て體裁の虛飾を避け、印刷、製本費等の低廉を期します。（一冊發賣定價參拾八錢）

三、會員はA、B二種とし

A 會員會費	月額	參拾五錢
B 會員會費	月額	五拾錢以上

B 會員は特に刊行會の事業を援助する者です。

四、A 會員には毎月叢書一冊を配付し、B 會員には記念の爲め同上番號記入、朝風氏自筆署名、特刷（非賣品）一冊を配付します。

五、贊同者は入會と同時に會費二箇月分を拂込み、以後冊子受領毎に翌月分會費を拂込み、最初拂込の内一箇月分を最後の會費とします。

會費は冊子到着を以て領收の證としますが、別に領收證入用の方は往復葉書又は返信用郵券添送を願ひます。

六、入會申込所 純正詩社内朝風詩歌集刊行會

（附記）本篇著次第次月分の會費を御拂込み下さい。新入會諸君は第二篇以下所要會費二箇月分、第一篇以來所要會費三箇月分。



集歌

(第二篇)

朝風幼時肖像挿入

半生の戀と餓

卷下發五月一日行

内
容

きづな
海岸町の二年

洲崎の埋立地に立つて
續少年の歌
少年の歌

そののちの歌

そのころの歌
餘情

(第三篇) 詳細第二篇に發表
詩句集

終

